

日

本

芸術

文

化学部

学

科





芸術文化学部長
灰谷 謙二

尾道は伝統的に芸術文化の街として発展してきました。2006年度に定められた市の総合計画「活力あふれ感性息づく芸術文化のまち『尾道』～ともに高めあう尾道文化の創造～」にもまちづくりの方向性として「芸術文化」を柱にしようという明確な意図が込められています。

知と美の探究と創造を理念とする本学は、美術学科と日本文学科を併せ持つ芸術文化学部を設置しました。尾道という都市の地勢的条件、経済的發展、文化的背景、そしてそこから生まれた人々の志が、具体的な学びの場として形になった稀有な学部だといえます。

尾道には、経済的發展が背景になり、多様な人々が集まる場、その交流のなかで新しいものが生まれること、異なるものを積極的に受け入れ、創造の機運を高める社会的な素地がある。そして若者の可能性を愛し、それを育てまた送り出す気風があるともいえるでしょうか。短期的で表面的な「材」としてみるのではない、大きな視野と立場で自らの生の意味をみつけ社会のなかで位置づけられる人を育てようとするものといえるかもしれません。

地方公立大学にとっては、なぜそれがこの土地につくられたのかというロケーションの意味は重要です。それをふまえて、芸術文化の具現としての美術と文学を芸術文化学部で学ぶことは、必ずユニークな意味を生むでしょう。芸術文化、ことばとことばで紡がれる知と美の世界を、ここでともに探究していきましょう。



日本文学科の入学者の受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）

日本文学科では、豊かな人間性と幅広い視野、高度な言語運用能力をもとに諸共同体のリーダー・教育者・創作者等として主体的に社会に貢献できる人の育成を目指しています。自らの力でテキストの精読や実地調査に基づく分析を行い、他者との議論や対話を通して言語文化の探究と創造に取り組む活動に重点をおいた教育を展開します。

このような教育理念・目的に基づき、日本文学科は次のような人を求めています。

- ・高等学校等までの教育課程において確かな国語の力を身につけた人
- ・問いをもって対象に向き合い、論理的に思考し判断する力を鍛えてきた人
- ・知的探究心をもって日本語・日本文学を深く研究していく意欲がある人
- ・文学作品のもつ多様な価値観を柔軟に受け止められる人
- ・読解力・表現力・対話力を活用して協働的に社会に参画する意欲がある人

詳細はこちら



日本文学科の授業

日本語学・日本文学・中国文学・欧米文学と、周辺領域である、民俗学・伝承文学・文芸創作・国語教育学等を専門教育科目とし、専門教育科目に発展的に関連・連携する、学部の特性を活かした学部共通科目、教養教育科目を配置しています。

自らの力で文学や言語についての資料を調査し、読み解き、それをもとに論理的に思考し、言語文化の探究と創造に取り組むために、議論や対話を重視した専門演習を配置します。これら言語文化の探究と創造の成果として、卒業論文・卒業制作を課しています。

豊かな人間性と幅広い視野をもって、高度な言語運用能力を発揮し、他者と議論や対話をおこなうための、少人数双方向教育を実施します。

学科紹介動画はこちら



授業紹介1

日本語表現法
レポーター
福田 穂香
(日本文学科2年)



日本語表現法は、レトリックを中心に、韻やなぞかけなどの言葉遊び、キャラクター語、物語論など、まさに日本語の「表現」に関わることを幅広く学びます。日本語表現と聞くと簡単そうに見えますが、これが意外と難しい。当たり前のように溶け込んでいる日本語表現を読み解くには見方を変えねば気づかないものばかりで、講義中は近くの学生と首をひねりながら問題に取り組みました。

期末には、講義内容に関わる範囲で各自の興味のある分野について好みに探究することができます。例えば、好きな作家が使う比喩表現、童謡に登場するオノマトペ、はたまたアイスやドーナツのネーミングなど学生によって様々です。私は物語論で学んだ「視点」と結び付けて、「ノンフィクション小説は誰が語るのか?」というテーマで発表とレポートを行いました。

正直な話、前半期で一番楽しい授業でした。私たちの周りに何気なく存在している日本語を見つめ直す良い機会になると思います。

授業紹介2

現代語学専門演習
レポーター
皆越 晴日
(日本文学科3年)



日本文学科の専門演習講義では、日本文学やその周辺領域の研究の理論や方法、専門知識を学びます。

現代語学専門演習では、主に方言研究が行われています。この授業では、現代語学の研究に必要なフィールドワークの方法や音声資料の文字化の仕方、データの整理や表現の仕方を学ぶことができます。また、学んだことを活かしながら自身の興味のあることについて調査、発表をします。発表では他の学生からの質問や先生からのアドバイスを通して新しい問題や視点に気づくことができます。

現代語学では、自分が集めたデータから考察をすることが一つの大きな条件になるため、データの集め方や、データの整理の仕方、示し方が大切になります。初めは調査が上手くいかないこともありますが、先生からのアドバイスからより有効的な調査方法を知る事ができます。このようなデータの扱い方や論の展開の方法は、仕事をするうえでも役に立つため、将来的に役に立つスキルを身に着けることができることもこの授業の良い点の一つだと考えています。

授業紹介3

日本文学講義Ⅳ
レポーター
大木 悠
(日本文学科4年)



2025年度の「日本文学講義Ⅳ」の講義では、坂口安吾の書いた『明治開化 安吾捕物』シリーズの第一作目と第十一～二十作目までを題材として読みました。担当される原先生が坂口安吾を研究対象とされているため、作品だけではなく作家についても多面的に教えていただけます。坂口安吾の本名は炳五(へいご)であり丙午(ひのえうま)年生まれ(五男であるという意味である、という作家紹介から始まり、ここから丙午年生まれの女性に関するジンクスも教えていただきました。

「捕物帖」というのは、時代小説とミステリーがミックスされたジャンルで、取り上げられたシリーズはその名の通り明治時代の文明開化期を舞台に描かれたものです。「洋行帰り」の探偵・結城新十郎が主人公で、ライバルとしてかの有名な勝海舟が描かれます。ひとつひとつの物語を事前に読んで講義に臨み、講義では語釈や同時代評を確認した上で考察に入っていきます。

また、この講義に限らずですが、原先生の担当される講義ではレジュメをもとに講義が進行していきます。先述しましたが、作家の人間性や他の作家とのつながり、作品の豆知識なども教えてください。先生が楽しんでくださるため、楽しみながら知識が増えていきます。先生が楽しそうに語られるので学生側もワクワクしながら話を聞くことが出来ます。

授業紹介4

中世文学ゼミ
レポーター
脇 彩音
(日本文学科4年)



大学は4年間ありますが2年次にはゼミを選択し、3年、4年次にはゼミに所属しながら自分の興味関心のある分野を研究することができます。

中世文学ゼミの場合、3年前期の期間は先生から1ヶ月に一回貸していただいた本を読み、感想文を書きます。自分が興味を持っているものに沿った本を貸していただけるので、前期の間は研究テーマを考えつつ、自分の知識を深める期間になります。この時間があつたからこそ、後期で研究テーマを決める際に納得のいくテーマを見つけられたと思います。

3年次後期が始まると毎回ゼミ生の発表を行います。11月にある研究発表会に向けて、10月はほぼ毎週資料を作成し発表を行いました。その過程は大変でしたが、自身の好きなことを探究し考え続けることが楽しいという思いが大きかったです。また発表後には質疑応答を行い、自身の研究を更に深め、様々な視点から多角的に見直すことができるようになりました。質問は怖いというマイナスのものではなく、他者から意見をもらえるいい機会というふうに捉えることができるようになりました。

大学生は人生の夏休みとよく言われます。この言葉は、自身のやりたいこと学びたいことに挑戦できる貴重な時間を指すものだと私は思います。大学で過ごす4年間は、自分の興味関心のある分野を専門的に学べる大切な時間です。ゼミは、4年間のうちの2年間という長くも感じられる限られた時間の中で、自分の「知りたい」ことを追求し、研究を行える場です。大変ではありますが同時に楽しさを感じ、学ぶということの本質を見つけることができました。

3.考察

ノンフィクションなどの作品は一人称で語られることが多い。しかし、実際の人物の心情がそのまま語られているわけではない。



ノンフィクションの物語化に伴って、物語の外にいた語り手が実在した人物に「成り代わって」語る場合が多くなったのではないだろうか？

私は尾道市立大学で日本語学に出会い、現在、九州大学大学院修士課程2年に在籍して研究を続けています。私は「自分の好きなものは何か、なぜ好きか」を本気で考えて行動してきました。それが今の研究にも生かされています。

例えば、中学1年生の時コカコーラのCMで流れてきた椎名林檎の『長く短い祭』を聞いて、これはすごくカッコいいぞと思いました。なぜカッコいいのか。その曲に「忘るまじ我らの夏を」という歌詞があります。助動詞「まじ」に注目してみましょう。日本語の歴史では「まじ」は平安時代に使われるようになった打消推量・打消意志の助動詞で、室町時代に「まじい」に、そして「まい」という形に変化したと言われています。それでは、『長く短い祭』に出てくる「まじ」は、現代の用例としてどう捉えられるでしょうか。「まじ」は、日常的話し言葉としては使われなくなっています。しかし、私たちは椎名林檎の歌を聞いて、「忘れるな」という意味で使っていることを理解できますし、加えて「古風で、おしゃれ」という要素を受け取ることもできます。

私は日常の話し言葉に使われなくなった言葉に「古風で、おしゃれ／厳めしい／きちんとしているetc.」という要素が付加されて使われることに興味を持ち、他の時代の人もそのような感覚で言葉を使っていたのではないかと、それはどのように行われてきたのだろうか、という問いを立てました。それに答えるために、江戸時代の人形浄瑠璃の脚本を主に使いながら、江戸時代の人々が古めかしいと感じる言葉遣いについて考えています。特別な言葉遣いがあることに気づくには、一般的にどうかを知っていなければなりませんし、そのために江戸時代やそれ以前の時代のたくさんの資料

やそこに現れている言葉について学ぶ必要があります。尾道では授業や自主ゼミで、くずし字で書かれた資料を扱うための勉強をしました。そのおかげで今は普段から自分の目的に合わせて古い資料を扱うことができます。一方で、最近はプログラミングを習得し、大量の言語データを組織して、人の目では気づきにくいポイントを探っています。

このように、好きなものがなぜ好きかを考え始めると、他の好きなものとどんどんつながり、新しく好きになるものも増えていきます。それができたら、尾道にいても、九州にいても、どこにいても私は大丈夫だと思います。

九州大学大学院
原 優花
(2024年度卒業生)



私は現在、奈良県天理市にある「なら歴史芸術文化村」という全体が道の駅に登録されている施設で、学芸員として勤務しています。文化村では歴史・芸術、食と農など奈良の多彩な文化に触れることができ、特に「文化財修復・展示棟」では、「歴史的建造物」「考古遺物」「絵画・書跡等」「仏像等彫刻」の、四つの文化財修復工房が通年公開されており、修理作業現場を見学することができます。私は、展示・調査研究などの学芸業務に加え、四つの工房をお客様に案内する「修復工房見学ツアー」も担当しています。お客様との直接的なやり取りは、思いも寄らない気づきを得ることがあり、自分も文化財修理について理解を深められるよう、定期的な知識のアップデートを心がけています。業務に携わる中で、貴重な経験と学びを得る日々を送っています。

在学時から「学芸員」という仕事に興味があった私は、「学芸員資格取得関係科目」を受講していました。講義は座学のみではなく、学年を経るごとに卷子や掛軸の取り扱いなどの実習があり、実践的な学習にも取り組みました。こ



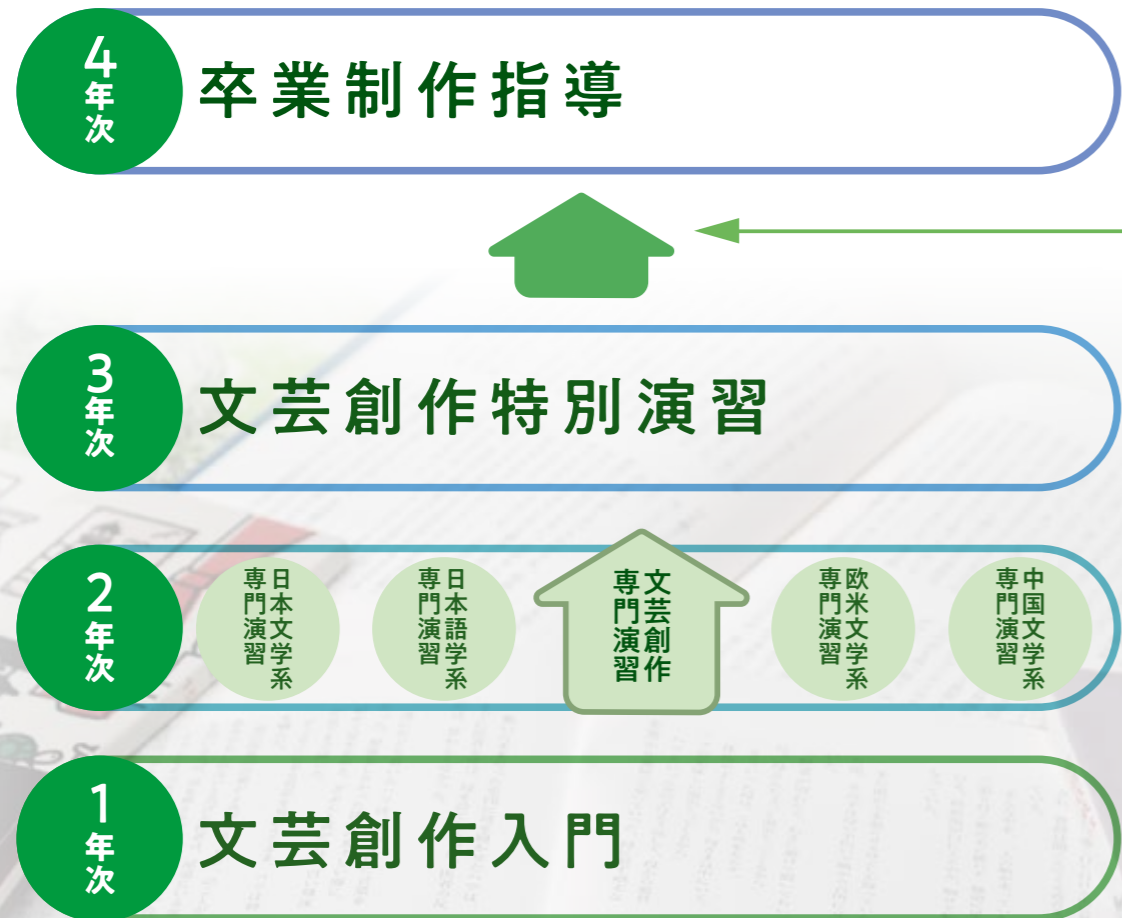
の時の学びが、今も作品の取り扱いや展示作業の場面で活かしていると強く感じています。また、在学時代に多くの文献や資料を手に取りましたが、今でも調査研究において、資料集めは欠かせません。当時の研究発表や意見交換の場で鍛えてきた「経験」が、「今」に繋がっていることをとても嬉しく思います。

これまでを通し、重要だと思うのは「経験を積むこと」です。尾道は「文学のまち」であることも然ることながら、歴史的・文化的な環境が整った素晴らしいまちです。そんな尾道では大学生の今だからこそ、できることが多くあります。大学生活の中で得た経験やご縁は財産となり、将来の自分を形づくってくれるものだと思っています。ぜひ、尾道市立大学で学びを深め、今しかできないことにたくさん挑戦し、大学生活を楽しんでください。

なら歴史芸術文化村
北村 凜
(2024年度卒業生)



尾道市立大学日本文学科には、学生自らが新たな文学作品を創作し卒業制作として提出する〈文芸創作プログラム〉があります。



卒業制作のジャンル等

卒業制作では、主に小説の執筆に取り組む人が多いですが、戯曲を書いて上演したり、オーディオドラマの脚本を書いて制作したり、詩作と批評を組み合わせるなど、形式も様々です。ジャンルもミステリー、SF、ファンタジー、歴史小説、時代小説など多岐にわたり、複数のジャンルを横断するような形でライトノベル要素の強い小説を書き上げる人もいれば、いずれかのジャンルに単純には分類することのできない複雑なモチーフ・テーマを取り上げる人もいます。

文芸創作を志望する人たちの取り組み

4年次

4年次にはこれまでの学びを活かした集大成となる卒業制作に取り組みます。ここでは、ジャンルを問わず最も自身の力を発揮できる創作スタイルで執筆ができます。私は戯曲の形式で、3年次の研究を活かし、人物の魅せ方を工夫した作品に仕上げたいと考えています。

選考について

3年次終了後、創作ゼミに入るための選考が行われます。選考は、希望者が定員の10名を下回る場合でも行われます。3年次までの成績(GPA)、ポートフォリオの学修記録と読書記録、外部の文学賞・コンクールへの応募が主な選考基準となります。1年次からこまめにポートフォリオを記録し、文芸創作に取り組んでおくことが大切です。

選考を通らなかった場合は、3年次に所属していたゼミで4年次も引き続き研究を行います。

3年次

3年次には「文芸創作専門演習」と「文芸創作特別演習」を履修しました。専門演習では描写に注目し、風景・人物描写、ワンシーンの描き方を磨き、自身の構想を一つの物語へとまとめ上げる力を身につけました。また特別演習では、漢詩や児童文学など多彩なジャンルの文芸に挑戦し、創作スタイルの幅を広げることができます。並行して、3年次から始まるゼミでは「伝承文学ゼミ」を選択し、4年次の卒業制作に向けた本格的な研究がスタートしました。『日本霊異記』に登場する「霊鬼」という存在について同作品内に登場する他の鬼との比較や、霊鬼が退治されるというストーリーと併せて、物語内で「霊鬼」の象徴性とは何か作者が意図したものは何かという研究を行いました。

2年次

2年次には専門演習の授業が開講されます。私は「伝承文学専門演習」を履修し、前期は説話集を後期は昔話を扱い、他の文学とは少し異なる成立背景や地域差、民俗学的観点から伝承文学の特性について研究しました。私はサークル活動で戯曲を執筆しており、卒業制作でも脚本を書きたいと考えていたので、専門演習で取り扱った作品の語り方や魅せ方について注目しながら読み解きました。

1年次

1年次には「文芸創作入門」を履修しました。この授業では最終的な成果物として、受講生でグループワークを行い、各グループでテーマを掲げ雑誌を作成します。雑誌作成に向けて各講義では、韻文への挑戦・教科書等の歴史的記述の分析・修辞技法の模倣など、日常的な表現から文芸の文体まで幅広く物語やメディアの「文法」を学ぶことができます。また、毎回、講義内容に沿った課題に取り組み、全体への共有や合評会を行うため、他の受講生の作品やコメントからも多角的な視点を得ることができます。



日本文学科4年
植木 由佳

日本語学



日本語学(現代語)
教授 灰谷 謙二

〇〇方言とか〇〇語とか、いろんな概念で区切られ語られるものを「～ことば」ということがあります。わたしたちが人とまじわり人と生きていく、その切実な生活実感をとまなうとき「ことば」と呼びたくなります。現代語を扱いますが、「今を生きる、生活の中の話しことばと書きことば」の表現であることを置き去りにしないよう心がけています。



日本語学(古典語)
教授 藤本 真理子

今、私たちが話したり書いたりしていることばと、昔の人のことばとは、どこかでつながっているはずなのに、どんなふうに変ってきたのか、分からないことがまだたくさんあります。古い資料の全てが残っているわけではなく、資料の点と点をつないで、歴史や変化の図を描いていくのは、私たちに任されています。他言語や日本の方言など、さまざまなことばの変化をヒントに、皆さんもストーリーを一緒に描いていきませんか。



日本語学(言語学)
講師 高島 彬

なぜ世界には多くの言語があるのか。なぜ「ことば」は世界に1つではいけないのか... その答えは、それぞれの「ことば」にその「ことば」を話す人たちの思考や世界の捉え方が色濃く反映されているからです。「ことば」の研究を通して人間について深く考える。この面白さを多くの学生と共有し、共に探求していきたいと思っています。

学生対談：尾大の日本語学ってどう？



2年生 嶋崎そよ風さん
(北海道・北広島高校出身)

Q：尾大を志望した理由は？

安積：私はもともと中高どっちも国語が得意で。大学も文学部系というか、言葉関連のことが学べる大学に行きたいなと思っていて。高校生の頃は、言葉の移り変わりみたいなものに興味を持っていて、室町から江戸になって現代にみたい、その言葉の使い方がどのように変わってきたのかを学びたいなと思って

大学を探した時に、一番近いことをされているのが藤本先生だったので、尾道市立大学を目指しました。

嶋崎：私も小学生の頃から国語が好きだったし、中高もずっと得意で。あとは、私は字が書けるようになったくらいからずっと物語を書いて、ノートとかに書くのが好きで。高校までやってたんですけど、せっかくなら大学でも創作に役立つようなことを勉強したいなと思って。文芸創作だとか、それに関連する言葉の使い方とか。こう、修辞法みたいなものも勉強したいなと思って選びました。

Q：実際に入学してみて日本語学の授業で印象に残っていることは？

安積：現代語学の講義で、受講しているみんなが、各々自分の出身地の方言について発表する授業があって、自分とは違う方言を使ってきたことが面白く、その使い方などを知ることができて、こういう言葉があるんだとか、同じ言葉だけど使い方が違うとか、すごい刺激になった授業で、印象に残ってます。

嶋崎：日本語表現法で、私は文芸創作が好きなので、すごく楽しくて。今まで漠然とこう、比喩だとか思ってたものが、具体的に、こういうものだったんだなというのが分かって。自分で書くときも、本を読むときにも。ただ内容を楽しむだけでなく、こういう手法が使われているんだとか考えられるようになって、知ってたはずの世界が鮮明になるような感覚がしました。

Q：それぞれの先生のイメージは？

安積：灰谷先生、一個質問すると百の知識で返ってくる。灰谷先生は広島出身で、ずっと広島の方言を研究されているんですけど、私の出身の岡山の方言について聞いても答えてくださるのがすごいなと思ってます。

嶋崎：もちろん知識の深さもあるけど、経験の深さというか、いつもニコニコしていて懐の深い感じ。

安積：藤本先生も質問したら答えてくださるんですけど、全部教えてくれるんじゃないかと、なんかその一歩手前までという

か、核心的なことは自分で気づけるように、サポートしてくれる先生。古典語なんで、資料の大切さ、こういう資料からこういうことが読み取れるみたいなことをわかりやすく教えてくれる。語学の先生なので言語化がすごい上手になって。

嶋崎：発表の前にグループごとで、授業外にも時間をとって相談のってくださる。レポートの書き方とかも詳しく教えてくださったりして。すごく安心感がある。よく見てくださってる方だということ印象です。

嶋崎：高島先生の授業は、知らない世界を見せてくれるというより、なんか見えてたはずのものをこういうことだったんだってわかるみたいなことが多かった。

安積：各授業で疑問に思ったことを授業後のコメントシートに書いたら、先生からのコメントで、例えば、こういうのに興味があるんだしたら、語用論とかにつながってくるから... みたいな。一個の疑問から、点と点をつなげるように、サポートしてくださる先生。



3年生 安積 遥香さん
(岡山県・就実高校出身)

高校生へのメッセージ！

安積：言葉の勉強をしたいんだしたら、まず日常の中で使われている会話とかに意識を向けてみると、意外とえっこれってどういうことなんだらうとか、こっつて人と違うなところか意外とわかりやすく見えるので、ちょっと意識してみたいなって思います。

嶋崎：生まれた時から日本に住んでるから、日本語を別に深く考えなくても話せちゃうし、書けちゃうので、日常的には困らないけど、よく考えたら、これってどうなってるんだらうとか、なんか変じゃない？って思うときは、一生の中にいっぱいあると思う。そういう小さなことから、あれ？って思う癖をつけたら楽しくなかなって思います。

ヤラセナシ!!

ゼミ生に

〇〇文学とは？

中古文学



教授
宮谷 聡美

平安時代に成立した文学。
源氏物語、枕草子、土佐日記など様々な種類の
作品が盛んに執筆された。

中世文学



教授
藤川 功和

戦乱の中紡がれた新たな価値観と、煌びやかな
生活だけではない日本の姿を描いた文学。
探してみると、世に知られていない作品がたくさん
出てきて楽しいです。

近世文学



准教授
吉田 宰

主に江戸時代の近世小説を取り扱い、本草学、出版
文化なども考察対象とする文学です。

聞いてみた

〇〇ゼミの雰囲気は？



ゼミ生との食事会

ふわふわと柔らかな
雰囲気です。話し
やすい人ばかりで、
研究の話も日常の話
も盛り上がります。

ゼミ生一人一人が意
欲をもち、主体的に
研究を進める姿勢が
大切になってくるゼ
ミです。



中世ゼミ生卒業論文提出の一コマ

穏やかな雰囲気です。学生
のペースに合わせて研究を
進めることができます。

歌川豊広画

(雪中恵比寿美人相合傘)

(吉田架蔵本)



〇〇先生はどんな人？

温かくて優しい先生です。研究に
まっすぐな意見をしてくださり、
相談にも向き合ってください先生
です。

他ゼミを勧められることもありま
すが、学生一人ひとりの関心に
寄り添ってくださる温かい先生
です。

とても優しく朗らかな
先生です。学生ひとり
ひとりに真摯に向き
合ってくださいます。



教授
柴 市郎

私の専門領域は日本近代文学です。明治時代から昭和期までの文学を主要な研究対象としています。作家で言えば、夏目漱石や小林秀雄といった文学者たちが対象です。さらに現在は、映画など活字メディア以外の分野についても考察しています。

近年、文学研究の世界は多様化し、学会の研究誌にも、アニメーションなどのサブ・カルチャーや映画に関する研究論文が掲載される時代になりました。

こうした新たな文学研究の動向にも配慮し、多様なジャンルの表現にも視野を広げてもらえるよう、講義・演習をおこなっています。



近 現
明 大
治 正

代 文 学
昭 平 令
和 成 和



【ゼミ風景】 人数：6名

卒業論文のテーマ：夢野久作、谷崎潤一郎、新見南吉、宮沢賢治、太宰治、江戸川乱歩

【授業】

前期：「日本の文学」、「日本文学史」、「近現代文学専門演習」、「卒業論文（構想・準備）」など

後期：「日本文学講読」、「日本文学講義」、「近現代文学専門演習」、

「卒業論文（制作）」など

【著書&編集協力】

『坂口安吾 歴史を探偵すること』（双文社出版 二〇一三年）

【研究対象】

坂口安吾・太宰治など／歴史時代小説／カストリ雑誌



「坂口安吾大辞典」



「田中英光事典」





教授
鷹橋 明久

中国文学



日本文化は長い歴史の中で多彩な地域の影響を受けて形成されてきましたが、中でも中国文化は漢字や思想、芸術様式などを通じて、日本の文化や文学に深遠な影響を与えてきました。私は特に、魏晉南北朝の詩文に専門的関心を寄せ、この時代に生まれた文学的革新や美意識が、どのように日本の和歌や物語文学に創造的影響を及ぼしたかを探究してまいりました。

私が注目しているのは、魏晉南北朝文学における「言志」の伝統や「玄学の世界観」、さらには「山水文学」の萌芽が、日本で独自に咀嚼され、文化的アイデンティティの核として根付いていく過程です。例えば、建安文学の情感表現や竹林七賢の清談思想、陶淵明の田園詩に見られる隠逸の美学などが、日本の貴族文化や隠棲文学に与えた示唆は計り知れず、そこから日本文学が独自の美学を育てていくダイナミズムには、文化交流の創造的可能性が凝縮されています。

現代社会では、世界中の文化や情報が瞬時に触れられる一方で、魏晉南北朝という中国文学の変革期が培った知的冒険精神や美意識に親しむ機会が減少しがちです。しかし、この時代の書法や文人思想を継承した芸術実践を通じて古典の精神を受け継ぎ、現代的感性で新たな表現を模索する人々も着実に増加しています。私の授業や研究においても、魏晉南北朝の詩文の精読にとどまらず、政治的分裂と文化的統合の時代背景、儒教・道教・仏教の思想的交錯、東アジア諸国への文化伝播など、重層的な視座から文学を読み解くことを重視しています。

このような多元的視点から魏晉南北朝文学に向き合うと、「文」と「質」の相克、個性的表現の勃興、士人意識の変容など、激動期ならではの文学的営みが浮かび上がってきます。この理解は、多様な価値観が交錯するグローバル社会において、異文化への深い洞察力和柔軟な思考を育む貴重な基盤となるでしょう。

皆さんと共に、阮籍や陸機、陶淵明、鮑照や謝靈運といった文人たちが魂を込めて紡いだ作品の魅力や、そこに宿る普遍的思想を共有し、新たな気づきと創造の源泉としたと願っています。魏晉南北朝の詩文が今日に伝える言葉の深み、表現の妙、そして士人たちの精神世界を、授業を通して一緒に探求していきましょう。そこに見出される美意識や思想は、現代を生きる私たちに新たな発見と示唆をもたらしてくれるはずです。



教授
藤井 佐美

民俗学・伝承文学

隣接領域である文学と民俗学に注目しながら、日本の伝承、文化を研究しています。個人的には、学侶が唱導に用いた昔話や伝説などの口伝世界を研究対象とし、地域の文化調査も進めています。まったく別世界に思われる分野が自然に結びついたとき、日本文化の奥深さを実感すると同時に伝承の世界が少しずつ身近になります。ゼミには好奇心旺盛な学生たちが集まり、バラエティに富む調査・研究を楽しんでいます。

2025年度
民俗学・伝承文学ゼミ



国語科教育法Ⅱでの模擬授業風景

国語教育学



教授
山田 和夫

「国語教育学」と聞いて、高校生までに授業を受けてきた経験から、なんとなく読み書きの力を高める方法を考える学問というイメージがあるかもしれません。確かにそれは間違いではありません。しかし、「国語教育学」の射程はもっと広く、国語科における教育の方法、読む・書く・話す・聞くという行為のメカニズムの解明、そもそも「国語」とは何かということを考える、など、扱う対象が多岐にわたります。つまり、子供たちの「言葉の力」を高めることに関することであれば、なんでも扱う学問であるということが出来ます。多様な領域を扱うがゆえに他の学問領域を意識しながら＝多様な人々と関わりながら、研究を進めていくことになります。

私自身は、「国語教育学」のうち、文学研究と子供たちの「言葉の力」の成長とをつなぐ側面に重点を置いて研究しています。多様な人と関わりながら、子供たちの「言葉の力」を高めていくことのできる人材を育てていきたいと思っています。



哲学・倫理学



講師
島田 喜行

「哲学・倫理学?」「興味はあるけど難しそう。」このようなイメージを抱くのも仕方ないのかもしれませんが。というのも、「哲学」とは何か、という問いにたいして、ビシッと明快に答えることはとても難しいからです。そもそも哲学は学問なのか。倫理(学)や道徳と違うのか。もし違うのなら、どこがどう違うのか。こうした問いはどれも、哲学者や研究者の間でも答え(意見)が色々できそうな難問です。わたくしもまだ最終的な答えを見つけられていません。

最終的な答えは提示できません。しかし、どんな哲学・倫理学にもあてはまる(とわたくしが考えている)ことなら提示できます。それは、哲学・倫理学が「世界-私-他者」について、その「在り方-生き方-関わり方」をめぐって、じつに多彩な思索を積み重ねてきた、ということです。この広大な思索のなかには、みなさんが知りたいと願うことの一答えではなく—手がかりがきつとあります。みなさん、自分が本当に知りたいと思うことの手がかりを見つける知的な探究を始めてみませんか。

欧米文学



教授
小畑 拓也

20世紀中頃以降のアメリカのSF (science fiction/speculative fiction)の研究を出発点として、文化研究 (cultural studies)の立場から、娯楽として消費されるステレオタイプ化したイメージ(ロボット、異星人、モンスターなど)の分析・再解釈を通じて、差別／排除を正当化しようとする「毒になる物語」への解毒剤を提供することを目指して、試行錯誤を続けています。

「欧米文学概論」・「欧米文学講義」・「比較文学」の講義科目では、「文学」との関わり方を「趣味・消費」から「研究・再生産」へと切り替えてゆく上で必要となる、専門用語の提示・解説に注力しています。演習科目の「欧米文学専門演習」では、情報収集と分析の訓練を外国語資料の読解を通じて積んでもらうことにしています。



英語



教授
高垣 俊之

私は主に2・3年生を対象に英語を教えています。学生の皆さんの中には、大学に入ってから英語を勉強しなければならないのかと溜息をつく人がいるかもしれません。しかし、洋の東西を問わず、有名な作家や知識人の多くは外国語学習あるいは外国生活を通して言語観や表現技能を高めていったと思われる節があります。皆さんにも意欲的に英語と格闘してもらい、母語と外国語の言語能力に磨きをかけてもらいたいと願っています。

研究面では、英語の習得と使用に関する諸問題をマルチリンガリズムの枠組みの中で考えています。研究成果としては以下のようなものがあります。

- ・『新装版：カナダの継承語教育—多文化・多言語主義をめざして』(2020) 共訳、明石書店
- ・『英語デトックス—世界は英語だけじゃない』(2016) 分担執筆、くろしお出版
- ・『英語の習得と使用—バイリンガリズムの視点から』(2014) 単著、溪水社



教授
平山 直樹

私の専門分野は英語学で、15世紀イギリスの名家であるパストン家の人々が生きた日常の手紙や法的文書などの英語を研究しています。書き手が自分の考えを表す時に使うI thinkや、相手をお願いする時に使うI pray youが、文の最初、内部、文末で使われる場合に、それぞれどのような意味を持っているかを明らかにするために、手紙の送り手と受け手の社会的な関係や、日常の手紙なのか契約書なのかという文書の形式の違いなどに着目して調べてきました。

授業は教養教育科目の英語を担当しています。TOEIC対策の授業ではテスト対策をするだけでなく、ビジネスや日常の場面で使う英語の基礎力を身につけることを目指します。また、読解演習を中心とした授業

では、文構造や談話構造、更には英語と日本語の事態に対する認知方法の違いにも留意して解釈をする練習を繰り返します。これにより、辞書と読解方略を組み合わせることで英文を正しく読み、授業後も自己学習を進められる力を身につけることを目指します。



オックスフォード大学、モードリン・カレッジ
(右側の棟が特徴的)

尾道逍遙

おのみち文化スタディ



新入生と上級生・教員と一緒に街歩きをして、尾道の歴史と文化を学ぶ教育プログラムです。
グループに分かれて尾道市内を散策し、実地踏査で得た情報をもとに、報告会でグループ発表をします。

聖地巡礼

フィールドワーク



日本文学科専門教育科目の一つで、三年次以降に履修する科目です。授業の目的は、日本文学研究と文芸創作に結びつく**実地踏査**をおこない、机上の学習では得られない資料収集や調査研究能力を養うことです。また、事前学修と事後学修と
おして、企画立案能力と報告能力を身につけながら、歴史学・民俗学・日本語学および日本文学等の点からも広く日本文化について学ぶこともねらいとしています。

尾道文学談話会



尾道文学談話会会報 第16号表紙デザイン
美術学科2025年度卒業生 竹邊 沙彩さん

日本文学科を中心とする本学の教員が文学や言葉にかかわるさまざまな話題を提供し、地域の方々と大学の外で語り合う形式の公開講座です。ここでの成果は毎年『尾道文学談話会会報』にまとめられており、会誌の内容はインターネットでもご覧いただけます。



会報第16号はこちら

2026年度・尾道文学談話会 (全6回)

- 第1回 『遠野物語』の座敷童子伝承を読む
藤井 佐美 (日本文学科教授)
- 第2回 『遠野物語』の河童伝承を読む
藤井 佐美 (日本文学科教授)
- 第3回 「小説の中の英会話」
高垣 俊之 (日本文学科教授)
- 第4回 「高等学校国語教科書に収められている漢詩について」
山田 和太 (日本文学科教授)
- 第5回 「『人生の書』としての哲学
一生というミステリーあるいは人間性の探究のために」
島田 喜行 (日本文学科講師)
- 第6回 『豊臣兄弟!』外伝!?—正解は半年後—
藤川 功和 (日本文学科教授)

虚構研究会



虚構研究会

虚構研究会は人文学・芸術分野の様々な事象について情報共有・意見交換を行う場です。文字を媒体とした文学ジャンルはもちろん、視覚映像・音声・空間、さらにはそれらが複合するものも含めたあらゆるメディア上の虚構・物語・表現を、研究・考察の対象にしています。

これまでに、参加者が推薦するマンガや小説を取り上げた読書会、海外アニメや映画を分析的に見るための鑑賞会、特定のビデオゲームについて考察する討論会、好きな楽曲を挙げて音楽的な視野を広げてゆく会、ジャンルを問わず自分自身が影響を受けたものについてゆるりと語り合う会などを行ってきました。

人間が認識している世界(現実)は、人間が五感を通して得た情報をすべて人間に把握可能な形に再構成し、書き直した「虚構」です。私たちを取り巻く「現実」という「虚構」と一緒に読み解いてゆきましょう。(小畑 拓也 研究室)

高橋新太郎文庫

近代文学研究者、学習院女子大学元教授・高橋新太郎氏(昭和7~平成15)は、貴重な資料を含む膨大な蔵書を残されました。現在、日本文学科では、資料の整理、資料の展示会開催、データベース化作業に取り組んでいます。

2025年に開催された「オープンキャンパス」での展示



伝承文化研究会



探訪地でのひととき

村上海賊ミュージアム
特別展示の様子


日本の様々な伝承世界について、文献調査やフィールドワークから研究しています。祭を追いかけてたり縁起物を探したり、民話の探訪、古文書の活字化やデータベース化なども進めながら、後世に伝える方法を模索中です。くずし字から読み解いた『ばけ物三十六歌仙』の研究成果は『尾道文学談話会会報』第12号に掲載し、所蔵される村上海賊ミュージアムの特別展示や本学でもパネル展示をおこないました。これからも日本の多様な文化を楽しみながら伝えていきます。(藤井佐美研究室)

日本文学科主催公開講演会

公開講演会では、講談師の旭堂南海さんをお招きし、講談「神崎与五郎の東下り」をお読みいただきました。一般来場の方とともに話芸の魅力を堪能しました。

神崎与五郎の東下り
旭堂 南海 氏(講談師)






おの

尾道市立大学日本文学会



4年生
島袋 涼

沖縄では、「ご飯食べたの?」が「ご飯食べたば?」となるなど、文末に「ば」を置いて疑問を表すことがあります。私はこの文末詞「ば」の意味や用法、共通語との対応について考察しました。文学三昧では、他分野の先生方からご質問やご意見をいただき、自身の研究を新たな視点から見直す貴重な機会となりました。



4年生
上田 萌生

室町時代後期の公卿三条西実隆による独吟連歌作品『文明十九年六月二十五日 北野社御法楽 賦唐何連歌百韻』は応仁の乱の十年後に張行された連歌会で詠まれたものです。自身で翻刻した本文をもとに、その連歌表現を探るべく研究発表に取り組みました。



4年生
金光 七穂

近世の百物語作品の中で足のない幽霊が登場するのは『太平百物語』が始めであることから、『太平百物語』の幽霊話に注目して『伽婢子』などの他作品の幽霊話とも比較を行いながら幽霊の特徴について発表しました。発表を通して貴重なご意見やご指摘をいただいたことで、自身の研究を見つめ直す機会にもなりました。



4年生
宮元 望

夢野久作「死後の恋」における独白の語り手と受け手に注目し、史実のロシア皇女伝説と物語の登場人物を照らし合わせながら研究発表を行いました。発表を通して貴重なご指摘やご意見をいただいたため、とてもよい機会になりました！ただグロイだけじゃない。その魅力を追い求めて私は研究する。

おのみち文学三昧は、学会と公開講演会を連動した日本文学科による文学イベントで、毎年12月に尾道駅前のしまなみ交流館で開催しています。昨年度の学会大会では、三年生研究発表会発表者の中から選抜された4名に、日本文学科の新任教員一名を加えた5名が、文学とその周辺領域に関する最新の研究成果を発表し、活発な議論が交わされました。

卒業論文の階梯（2025年度卒業生 森 俊介さんの場合）

タイトル：『円明寺関白集』の撰歌と配列

1. 卒業論文の内容 — 鎌倉中期の公卿・一条実経の家集『円明寺関白集』を取り上げ、その撰歌や配列について考えました。生前の勅撰集入集歌を撰んでいないことや、老いや死を詠んだ和歌が散見することを確認しました。また、家集末尾を神祇・釈教歌が飾る配列などに注目し、悟りを読み取りました。

2. 完成までの学修の履歴

1年生

基礎演習

2年生

専門演習

3年生

発表会(11月)

4年生

ゼミ

発表会(10月)

演習やゼミ等を通じて少しずつ研究の方法や論文執筆の基盤を固めていきます。また、講義を受けたり、自分で本や論文を読んだりして学びます。

3. 卒業論文を書くということ — 卒業論文の執筆に際しては、何を研究対象とするか？ どのような研究方法を取るか？ など度々選択を迫られます。そしてその選択には適宜理由が求められます。場合によっては再考することもあります。研究対象・方法が固まると、分析・考察を進めることとなりますが、これも吟味・再考の連続です。何度も調べ、考え、書き、また調べ直し、考え直し、書き直し……を繰り返してようやく卒業論文は完成します。さらに、完成してもなお、調べ、考えるべきこと、書き残したことがあると感じます。卒業論文を書くということは、ネットで検索したりAIに聞いたりして簡単に得られる類とは異なる答えを探すことではないかと思えます。



卒業論文

2025年度卒業論文・卒業制作・修士論文

●文芸創作領域	<ul style="list-style-type: none"> ●実録 卒業制作怪談 ●借別の日 ●水月 ●黒の王子 ●成物地方異形民話録
●日本語学領域	<ul style="list-style-type: none"> ●「ノム」と「酒」の結びつきに関する考察 ●静岡市方言における「テ＋補助動詞」形式の試みの表現についての研究 ●現代短歌における非定型性についての研究—初谷むい作品を中心に— ●広島方言におけるアスペクトをとまなわい「～テデス」形式についての研究 ●神輿のかけ声についての研究
●日本古典文学領域	<ul style="list-style-type: none"> ●和歌説話に付された役割と、その伝承過程を考える—村上天皇「あふさかも」歌説話収録作品を中心に— ●歌集における菅原道真—勅撰集を中心に— ●「白玉か」歌について—他の歌集と比較して— ●歌人「伊勢」の和歌について—「花の鏡」と「憂し」に着目して— ●「和泉式部日記」における独自性について—「つれづれのなぐさめ」と「南院入り」に注目して— ●「伊勢物語」第六段の役割について—二条の後章段に注目して— ●「伊勢物語」における友情—他の歌物語と比較して— ●「源氏物語」明石の君の母としての造形—紫の上との比較から— ●「ふせやものがたり」の和歌研究—慶應義塾図書館蔵本と万治二年本の比較考察— ●「雲隠六帖」における紫上の人物像と独自の展開の関わり—匂宮の即位と浮舟の還俗に注目して— ●「円明寺関白集」の撰歌と配列 ●「小倉山莊百人一首管註」の研究—注釈や末尾の引用に注目して— ●近松門左衛門「女殺油地獄」における「義理」 ●「南総里見八犬伝」における人物造型とその要因—大江親兵衛と犬山道節を中心に—
●日本近現代文学領域	<ul style="list-style-type: none"> ●江戸川乱歩「押絵と旅する男」論—お七と兄の恋を読み解く— ●宮沢賢治「双子の星」論—物語と星々— ●太宰治「人間失格」論—〈怒り〉に見る大庭葉蔵の《抵抗》— ●志賀直哉「クローディアスの日記」論—〈想い〉と二つの心がみせる志賀作品への系譜— ●織田作之助「天衣無縫」論—主人公の人物像と読者の理解— ●泉鏡花「外科室」論—制度化されゆく医療と個人の感情の葛藤— ●太宰治「斜陽」論—蛇と重なる〈道徳革命〉— ●浦沢直樹「MONSTER」論—生きた証と名前— ●芝木好子「洲崎パラダイス」における〈生きることへの積極性〉—徳子の〈忠告〉と〈諦め〉が照らし出すもの— ●まふまふの歌詞における表現特性—歌詞「大人」と、作曲者の大人観の変化について— ●宮澤賢治「やまなし」物語を映す「幻燈」の効果—「雪渡り」との比較を通して— ●白井カイウ「約束のネバーランド」論—棲み分けの模索とその背景について— ●今村昌弘「屍人荘の殺人」原作から映画への表現分析—音と映像が織りなす物語の再構築— ●漫画「チ。—地球の運動について—」論—フィクションとノンフィクションの交錯 ●萩原朔太郎「月に吠える」における身体性について—人称代名詞の推移に注目して—
●中国文学領域	<ul style="list-style-type: none"> ●東方朔の神仙化の過程について ●李益の人物像をめぐる矛盾—詩作品と歴史書記述の対比から—
●民俗学・伝承文学領域	<ul style="list-style-type: none"> ●雷除けのまじないの特異性—文学作品における記述の分析を通して— ●浦崎神楽の起源と松永湾周辺の神楽における継承—令和六年度～七年度調査報告— ●竹原市忠海祇園祭みこし行事とその意味—少子化社会における変容と再構築— ●東広島市における菖蒲前伝説の受容と継承—地域学習による伝承— ●愛媛県南予地方に分布する御霊信仰の研究—和霊信仰を巡る和霊騒動を中心に— ●枕飯・枕団子の役割—死穢の回避— ●島根県に和歌と共に残る伝説等の人物を見て—県民のらしさと特徴—
●国語教育学領域	<ul style="list-style-type: none"> ●挿絵が読みに与える影響について—教科書会社別挿絵の比較を通して— ●高等学校国語科における創作学習の評価を考える—パフォーマンス課題「大きな創作学習」の考案— ●他者とのコミュニケーションを図る力を高めるための授業について—パフォーマンス課題について考える—
●欧米文学・比較文学領域	<ul style="list-style-type: none"> ●日本における「不思議の国のアリス」の受容と「かわいい」文化